

えいらい

No.4

平成 22 年 5 月発行
発行元／財団法人永頼会 松山市民病院4・5
2010〒790-0067 愛媛県松山市大手町 2 丁目 6-5 TEL / 089-943-1151 FAX / 089-947-0026
発行責任者／院長 山本祐司 編集／松山市民病院広報委員会

- 今号のトピックス
- ◇巻頭言
 - ◇臨床の現場から：内科・腎臓病
 - ◇着任医師のご紹介
 - ◇お知らせ
 - ◇外来診療担当表

新年度雑感

—運動器の10年、最終年を迎えて—



副院長 萩山 吉孝

2月にバンクーバーオリンピックが開かれました。日本選手の活躍は目立ちませんでしたが、一流の選手の躍動は見るだけでも感動します。華やかなスポーツの世界からもう一方を振り返ると、私の専門である整形外科の目からは今年が「運動器の10年」の最終年であることに思い至ります。

WHOが提唱した Bone and joint decade 2001-2010、世界活動の一環として、我が国でも各方面での活動が広がられました。運動器の障害は子供から高齢者にいたるまで、生活機能やQOLを低下させ、はては生命予後にまで影響する事が指摘されています。

学童期の運動器検診や高齢者の寝たきり予防への予防医学的取り組みは、保健行政や地域医師会の方々が尽力されていますが、我々医療提供の立場からは、外傷から脳血管疾患、心血管疾患、腫瘍や感染症に至るまで、治療期間中の運動機能低下を最小限にして社会復帰へと導くことが重要な役割と言えます。

昨今は、心冠血管障害、脳血管障害の早期治療の必要性が言われ、高齢者の骨折などの外傷でも早期治療、早期離床が生命予後に影響する事は常識となっています。当院は急性期医療の担当として地域の先生方

のご要望に即応できる様に、職員一同頑張っております。救急、急性期医療から回復期、安定期へとスムーズに進めるためにも、地域の医療機関の方々との密接な連携の必要性があります。当院の地域連携室も充実しつつあり、診療情報の共有やご報告にも努めております。また、回復期や療養施設への流れの中で、地域連携パスの整備が望まれるところで

県立中央病院、松山赤十字病院と共に、単独で救急輪番を完遂できるように体制整備を命ぜられています。市中病院の常としてスペースの確保に悩んでおります。その中でも4月から小児科の夜間二次救急が再び可能となりました。他にも医療スタッフの増加で診療体制の充実が得られるところもあります。

現政権の医療政策も多少のぶれが感じられ、先行き不透明感が否めません。時代は変革期であるのに、私自身は戦いに参加する勇気をもたず身をすくめていたのですが、昨年の院長交代から、ペースチェンジの波に加わることになりました。「松山市民病院は地域住民のために存在する」という基本理念を全うするべく、山本院長を支え、努力していきたいと思っております。今後ともよろしく願いいたします。